

# 標準オッドボール課題に対するサイコパシー傾向 及び Dark Triad の影響

白尾綾音<sup>1</sup>・皿谷陽子<sup>2</sup>・井大杉朱美<sup>2</sup>・平伸二<sup>2</sup>

(<sup>1</sup> 福山大学大学院人間科学研究科, <sup>2</sup> 福山大学)

現在、日本の犯罪捜査におけるポリグラフ検査は、末梢神経系活動を指標として、情報検出に基づく隠匿情報検査 (concealed information test: CIT) のみで実施されている。CIT は、情報を知らなければ生理反応も生起しないため、誤判定の極めて少ない検査として国際的にも定評がある。その一方で、犯人を取り逃してしまう誤判定を生じさせる可能性のあるパーソナリティ等の個人差要因については、十分に検討されていない。そこで取り上げるパーソナリティ要因は、Dark Triad (DT) という3つのダークなパーソナリティ (サイコパシー傾向、マキャベリアニズム、自己愛傾向) である。サイコパシー傾向は、表面的な魅力、不安の欠如など、マキャベリアニズムは、操作的な対人戦略など、自己愛傾向は、自己への過度な陶醉などを特徴としている。本研究では、CIT への影響を検討する前段階として、サイコパシー傾向及び DT が、標準オッドボール課題による P300 振幅に与える影響を検証する。

## 方法

**実験参加者** 実験参加に同意した F 大学の学生 16 名 (平均年齢 21.0 歳,  $SD=1.03$ ) である。

**質問紙及び装置** サイコパシー傾向は日本語版 Levenson 自己記入式サイコパシー尺度を使用し、一次性サイコパシー (Primary Psychopathy: PP) と二次性サイコパシー (Secondary Psychopathy: SP) 別に得点化した。DT は日本語版 Short Dark Triad を用い、総得点とサイコパシー傾向、マキャベリアニズム、自己愛傾向の下位尺度別に得点化した。脳波の測定はミュキ技研生体信号収録装置ポリメイト V AP5148 一式を使用した。事象関連電位の加算平均処理には、トリガー認識加算ツール機能プログラム Trigger Select Average Tool 第 1 版 NoruPro Light Systems を使用した。

**指標** 脳波は Fz, Cz, Pz から測定した。

**刺激** 標準オッドボール課題は、低頻度呈示刺激 (標的刺激) が 2000 Hz, 高頻度呈示刺激 (標準刺激) が 1000 Hz, 呈示比率は 20% 対 80% であり、1500 ms ± 25% 間隔でランダムに呈示した。

**手続き** 実験参加者の課題は、低頻度呈示刺激が呈示されたら利き手でボタン押しをできるだけ速く正確に行うことであった。実験終了後、2 つの質問紙に回答を求めた。

## 結果

Figure 1 はサイコパシー尺度 (PP・SP) 及び DT の高群と低群における標的刺激と標準刺激に対する P300 振幅 (Pz) の結果である。Figure 1 から分かるように、刺激の差が見られるのに対し、両群の差はわずかであった。2 要因分散分析の結果、いずれの尺度においても、刺激要因の主効果は認められたが ( $ps < .001$ ), 群間要因の主効果及び両要因の交互作用は認められなかった ( $ps > .05$ )。また、DT の 3 つの下位尺度についても、同様に群間に関する有意差は認められなかった。さらに、標的刺激に対する P300 振幅と各尺度の間に、いずれも有意な相関は得られなかった ( $rs = -.32 \sim -.16, ps > .05$ )。

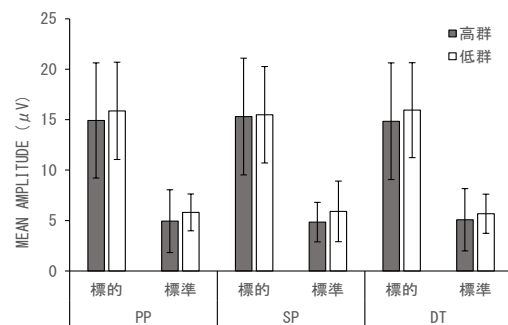


Figure 1. サイコパシー尺度 (PP・SP) 及び Dark Triad の高群と低群の各刺激に対する P300 振幅 (エラーバーは標準偏差)。DT は、サイコパシー傾向、マキャベリアニズム、自己愛傾向の合計から算出。

## 考察

本実験では、サイコパシー尺度 (PP・SP) 及び DT の各尺度は、標的刺激に対する P300 振幅に影響を与えなかった。これは Kiehl et al. (1999) が、P300 振幅へのサイコパスの影響を認めた結果と異なっていた。今後は、実験参加者を増やすこと、純音による音刺激だけでなく、情動喚起を生じさせる画像刺激での実験が、CIT への影響を検討する上で必要である。

(謝辞: 本研究は JSPS 科研費 21K03120 の助成を受けた。)